

《正岡子規（36）の続き》その299

天涯茫茫生

中村不折の続き

不折がそれまでの陋屋とは比較にならない立派な画室を開いたのは、明治32年12月26日である。根岸の子規庵から200メートル強（上根岸四十番）のところである。画室開きの祝の出席者は、鳴雪、羯南、浅井 忠、飄亭、虚子、碧梧桐、小山正太郎らであった。不折の転居のことは、子規の31年7月1日付の虚子宛の手紙にある。

その手紙には「不折は根岸に引越候由」とあり「候由」だから、本人の直話ではなく、他人からの伝聞であろう。従って詳しい地番なども承知しなかつたから、後述するように木村芳雨に問い合せたのであろう。

この書簡は、「ホトトギス」発行所を松山から東京に移し、虚子が発行と編輯をすることに、虚子も碧梧桐も極めて安易に考えていることに対し、子規はその事業の容易ならざることを、懇々と嘯んで含めるように説諭するのである。極めて長文で、講談社の全集でこの部分は約6頁もある。いかに子規が、雑誌の発行について考えていたかがうかがえるのである。己れ以外は碌な文章を書けないのではないかと云っている。出来るだけの助力は

おしまぬつもりだが、他を頼まず、二人でやることになるだろう。その時も一人が病気になるたら全くの一人でやるのだと決心をうながしている。

この頃はまた子規も外出ができ新築のよるこびまでに酒一升を持参するし、鬮汁に持ちよるべき野菜類も子規ほか三、四人が持参すると不折宛に通知している（明治32年12月25日朝発書簡）。

この不折の新築の画室の住所を、子規は門下の歌人で鍍金家の木村芳雨（本名三郎）に問いやつたはがき（明治32年10月14日発）に次の歌がある。

折れ曲り折れ曲りたる路地の奥に

折れずと云える畫師は住みをり

正確な所番地は知らないながら、その場所が幾曲りかした路地の奥にあることは承知していたらしい。画室開きがあることを知り、それに出席するために正確な町名番地を問い合せたものである。

不折の専門的な活動は、子規の死後のことに属するが、その生前に被った恩儀と思出を「子規追想」と題して書いている（ホトトギス 第十一巻第十二号 「子規居士七回忌号」 明治41・9・1）。

文章を書くことは好まぬといひながら、極めて長文で、今は講談社「子規全集」の別冊二でたやすく読むことができる。

それによると、はじめ新聞「小日本」社に入り、その廃刊後「日本」社に入ることに、子規の尽力があり、今日の地位を作ってくれたと感謝している。

子規が常識が非常に発達していて、上は大匠から、下は乞食に至るまで材料をあさり、植木屋でも肴屋でも来ればその仕事を尋ね、「墨汁一滴」や「病牀六尺」に人の驚くような、普通の文学者の気のかぬことを研究して書いている。

また見識の高かつたことに最も敬服しているといっている。当時は支那人、西洋人の云うことを金科玉条と心得ていたのに、子規は必ずしも先人の糟粕をなめなかつたなどを、縷々例を挙げている。

子規が長文で不折を詳した如く、不折も亦長文で子規を論評しているのである。

巴里留学中は、浅井 忠（奎助）、久保田米齊（世音）、美濃部達吉（古泉）、勝田主計（明庵）らと巴会を結成、子規ゆずりの句作を楽しんだ。

漱石は自作の小説に挿絵を描いてもらった縁で、不折宅を訪れたこともある。

明治38年9月5日付の弟子の野間眞綱宛の書簡には「此前の日曜には四方太と上野の日月会を見て、根岸の岡野から中村不折の家に行つて、晩は若竹の朝太夫をききに行つたので失敬しました」とある。漱石は落語好きだが、此時は義太夫でも聞きに行つたのか。